総務部広報県民課

「県政タウンミーティング」会議録

テーマ　**『知事と語る長野県の森林・林業の未来**
～多様な木材利用の創造～』

日　時　　平成 25 年２月 17 日（日）午後１時から２時 35 分まで

場　所　　塩尻市総合文化センター

目　次

１　知事あいさつ 1
２　意見交換 3
（１）意見交換前半 3
（２）意見交換後半 13
３　知事終わりのあいさつ 26

１　知事あいさつ

【長野県知事　阿部守一】

皆さんこんにちは。今日は森林フォーラムと県政タウンミーティングを一緒に開催するということで、森林・林業の関係者の皆さん、それから一般県民の皆さん、大勢お集まりをいただきまして、大変ありがとうございます。長野県では、新しい総合５か年計画の案を 20 日から開会予定の県議会に提出して、承認をもらった上で４月から新総合計画をスタートさせていきたいと思っています。

やはり長野県全体元気になっていかなきゃいけない。それにはやはり産業の振興だということで、「貢献と自立の産業構造への転換」ということを、政策推進の基本方針の大きな柱に据えています。確かに長野県は本当にいろんな資源が豊富です。例えば、エネルギーの関係でいけば、昨年からエネルギー元年ということで取り組んできていますが、太陽光利用では、日照時間が比較的長い地域が長野県多いです。それから水力発電も、これは皆さんご存知のとおり、長野県は水力発電のダムがいっぱいあります。東京電力あるいは関西電力に、長野県の水力からかなり電力を供給していますし、また県の企業局でも水力発電をやってきています。まだまだ小水力発電の可能性も非常に多い地域であります。それから今日話題になると思いますけども、バイオマスエネルギー、森林資源が非常に豊富な県でありますから、木材を木材として活用するということだけではなく、エネルギー源として活用していくということも、長野県にとってはこれからも大変重要なテーマであります。

私は、林業関係者の皆さんが大勢いらっしゃるなかで、大変恐縮な部分がありますけれども、私は実は、長野県は森林県だけど、林業県じゃないんじゃないかということを、いろいろなところで言わさせていただいております。また、皆さんから反論やお叱りをいただければと思いますけども、長野県の森林面積は県の８割、森林面積は 106 万ヘクタールあって、北海道、岩手県に次いで全国で３番目です。けれども１ヘクタールあたりの木材生産量は、全国で残念なことに 43 番目と、せっかく森林資源がいっぱいあるのに、ほとんど生かされてきてないというのが私の問題意識であります。

今まで生かしてこなかった要因というのは、いろいろあると思っておりますが、私は是非今日お集まりの皆さんの力を借りて、長野県を森林県でもあるし、林業が盛んな林業先進県にしていきたいと思っています。

先ほどのエネルギーの話もそうですし、それから森林も高度経済成長に向け

て国内の森林をどんどん伐採したものが、今また育っていっているわけであります。いろいろな環境が変化する中で、もう一回、森林を生かしていくことができる機会が巡ってきていると思います。ある意味で、林業にとっては大きなチャンスだと思っています。ただ、このチャンスをポジティブに、積極的に生かしていかないと、漫然と過ごしていくと、なかなか林業の活性化には繋がっていかないと思っています。国でも森林・林業のための財政支援、ここ数年、かなり手厚く対応していただいています。長野県もそうしたものを最大限生かしていきたいと思っています。また、森林組合はじめそれぞれの地域で、新しく高性能林業機械を入れたり、あるいは比較的若い方が担い手として参入されたりということで、どんどん森林・林業を取り巻く環境はフォロー（追い風）になりつつあります。

まだまだ、もちろん課題はいっぱいありますけれども、しばらく前に比べれば私は、固定価格買取制度の話も含めて、フォローになりつつあるなと思っています。これを本当の林業の活性化につなげていくことができるか、あるいは中途半端な形で終わってしまったなっていうふうになってしまうかは、ここ数年が正念場だというふうに私は思っています。

長野県は、全国でも数少ない林務部という林業専門の組織がある県でありますから、林務部の職員を先頭に、森林・林業政策が本当に長野県が誇る政策になっていけるように、長野県の大きな柱の産業として育ててくことができるように、取り組んでいきたいと思っていますので、林業関係の皆さん方はそれぞれのお立場で、しっかり取り組んで協力していただきたいと思いますし、一般の県民の皆さんは、「森の話って自分たちに関係ないや。」じゃなくて、是非少しでも多く森林を活用しようと、木材を使っていこうという思いを持って、それが長野県の発展にもなりますし、長野県の景観づくりにもなりますし、もっと言えば、地球環境を守っていくということにも繋がってくと思いますので、これを広く県民の皆さん方のご協力を私からはお願いしたいと思います。

今日は、大変心強い皆さん方が大勢いらっしゃいます。私はどちらかと言うと、専門家の皆さんからのご意見を聞かせていただくことを楽しみに来ました。是非会場の皆さんと一緒になって、長野県の森林・林業の未来を考えていく場になればと思っています。

どうぞよろしくお願いいたします。今日はありがとうございます。

２　意見交換

意見交換は、知事のほか、以下の皆さんを中心に行われました。
・進　行　役：小林　紀之　氏（日本大学大学院法務研究科客員教授）
・話題提供者：櫻井　秀彌　氏（征矢野建材株式会社代表取締役）
・　　〃　　浜田　久美子　氏（作家）
・　　〃　　鈴木　信哉　氏（中部森林管理局長）

なお、進行発言は一部省略しています。また、傍聴席から５名の方が発言していますが、以下では、全て【参加者】と表記します。

（１）意見交換前半

「木材利用の時代の到来～木材利用の今を考える～」

【進行役　小林紀之　氏】

本日のタウンミーティングの主旨につきましては、先ほどの阿部知事のあいさつの中で、ご理解いただけたと思います。本日意見交換をお願いするトピックは、次の２つでございます。

１つ目のトピックは、まず会場の皆さんと我が国の木材利用の現状、情勢の変化等につきまして共通認識を持ちたいということです。具体的には、「木材利用の時代の到来～木材利用の今を考える～」についてでございます。

２つ目のトピックは、それらの現状を受け、県民の身の回りの様々な用途で木材利用を進めていくという未来志向の観点から、「多様な木材利用の創造～あたりまえに木のある暮らしをめざして～」についてでございます。

それでは、早速１つ目のトピックであります「木材利用の時代の到来～木材利用の今を考える～」に入ります。

私から少しお話しさせていただきます。先ほど知事のごあいさつでもほとんど言い尽くされておりますが、補足的にお話ししたいと思います。皆さんご存知のとおり、森林には様々な価値がございます。１つは環境的価値、もう１つは木材生産等の経済的価値があります。これらの価値については、時代と共に変化してきておりますけれども、現在では環境とそれから経済、この両方を両立させていこうというのが森林経営の基本で、持続可能な森林経営ということが叫ばれているところでございます。

そのなかでやはり、林業、それから木材産業を活性化していくということで、はじめて持続可能な森林経営の形ではないかなというふうに思われます。何をさておいても、森林を元気にしていこうということが必要でありまして、皆さんご存知のとおり、温暖化防止法のなかで森林木材の働きというのは、極めて

重要であります。我が国の温暖化防止政策のなかでも非常に重要な視点になっております。ちなみに、今年終わりました京都議定書の第１約束期間では、6パーセントの我が国の削減目標のうち、3.6パーセントが森林による吸収でございます。今後も、やはり森林の働きが非常に重要視されると見られておりまして、我が国は京都議定書の第２約束期間には参加しておりませんけれども、温暖化防止政策は、当然ながら継続していくわけでございまして、そのなかで森林の役割がますます重要になってくると思います。

当県の事情につきましては、知事からお話しありましたとおりですけれども、森林県でありながら、林業は、それほど整備されていないという話がありました。総生産からみて、１ヘクタールあたりが 0.7 立法メートルで、全国で 43 位である。これは１位の宮崎県の約７分の１であります。もちろん様々な事情ございますけれども、やはり林業っていうのはまだまだ十分行われていないということが言えるかと思います。この 0.7 立法メートルというのは、成長量の８パーセントに過ぎないというふうなことも県のデータで出ております。先ほど私が言いましたように、持続可能な森林経営でいきますと、当然ながら成長量に見合うものは木材産業に活用していくというのが基本になってまいりますけれども、8パーセントしか使われていないというのが現実の数字であります。

ただ１つ当県におきまして、非常に私は優位な点が他にあると思うんですけども、カラマツの資源がたくさんあります。林業関係者の方はご存知だと思うんですけども、昭和 50 年のカラマツの価格は１万 9,000 円というふうに記録で出ております。平成 20 年時点では、1 万 6,000 円で、杉とか檜ですとかね、大幅に４割とか５割下がっておるなかで、カラマツの下がり幅は 15 パーセントということで、小さいわけです。つまりそれだけ相対的にカラマツの価値が出てまいったということだと思います。ちなみに現在では杉よりも少し高いというふうなことを聞いております。

ということで、森林県である長野県が、今後そういう森林・木材という宝の山を、どのように実のあるものにしていくか、というのが重要なポイントではないかと思います。

早速、初めに話題提供ということで、我が国の木材利用の動向や木材利用関連施策にお詳しい、鈴木様から、「我が国における木材利用の現状、動向」「近年の国の木材利用関連施策の転換」などの観点から、３分程度でお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

【話題提供者　鈴木信哉　氏】

今、森林県であって林業県でないというお話があったわけですけども、実はこれは日本全体にも当たることでして、日本は森林国というのはこれ間違いないことでしてね、全世界の中で、森林の比率っていうのは上から３番目なのです。そういう意味では森林国なんです。ところが林業国、木材産業国かっていうと、それは当たってない。

日本は、よく木の文化だと言われますけども、日本の木材消費量っていうのは、一人当たりの木材消費量っていうのはカナダの３分の１、アメリカの２分の１。フランスより低くてイギリス並みなんです。イギリスの山っていうのはほとんどないんです。切る山がほとんどないんです。その国に比べても同じくらいしか一人当たり木を使ってないんです。そういう意味では日本が使っているものは、何かというと、石油製品なんです。こちらの方がはるかに使っていて、実は森林国でありながら林業国ではないし、木材産業国でないってところがまず大事なことだと思います。

よく「国破れて山河あり」と言いますが、実は戦中の緊急伐採、戦後の戦災復興があって、戦後の日本は国破れて山には木がなかったんです。山河がなかったというのが私の一番の根本になっているんです。その後それでも木材業界景気が良かったじゃないかって言われるわけですけども、それは何かって言うと、ありとあらゆる物に木材が使われてたんです。その中で、先ず公共建築物なる大きな建物を全部木から離して、それから電柱・枕木を木材から離して、日用品である桶、樽、まな板とかを離して、そういうものを全部プラスチック製品に譲って、それでもなおかつ木材業界景気が良かったのは、住宅がべらぼうに建ったということです。それで、家さえ建てば木材業界がもうかるっていうことに、ずっと慣れ親しんできた。そのうち外材が入って来て、気が付いた時に国産材で使うのは柱だけになっちゃった。これをいわゆる「柱角林業」っていわれるわけですけれども。柱だけ作ってれば木材業界はもうかったということだと思います。

ここにきて、少子高齢化になり、家は建たなくなった。さてどうするの、ということが現状でございまして、これを変えていくには、もう一度、石油化学製品から木材に戻していくという対策が一番必要だということだと思います。私も山の中の育ちですけども、昔は山のなかでも鉄筋コンクリートの学校ができることが近代化の証だったんです。うちの村にもこういうものが欲しいと思

ったんです。実際に家の周りにもプラスチックを入れた方が、なんか近代的だなと思ったんですけど、実はこれが正しくないということで、これを変えていくっていうことが、一番のポイントではないかと思います。

そういう意味で鳩山内閣時代に、鳩山内閣ってお父様の時代ですけども、公共建築物は木造では作らないという国の方針が定められたわけですけども、この前の鳩山内閣の時に公共木造建築ということで、木材利用法っていうのができまして、歴史的な大転換をしたわけでございますので、これからもう一度失われた木材需要を、石油化学製品から取り戻していくということが、政策に入ってきているということでございます。またこの内容については、また今後ご報告をしたいと思います。導入部分ですので、これで終わりにしたいと思います。

【進行役　小林紀之　氏】

次に日本という枠を超え、より大きな観点として世界的な木材利用の状況にお詳しい櫻井様から、海外における木材利用の現状などの観点からお話をいただければと思います。

【話題提供者　櫻井秀彌　氏】

私のところは、関連会社で世界約 40 か国から住宅関連木材を輸入しております。そのような中で長野県のシチュエーション、急峻な山が多いそのなかで、今回オーストリアを参考にしたらどうかということを考えております。ご存じのとおり、アルプスの山麓にありますオーストリアも、急峻な山がたくさんございます。そのなかで木材マーケットの中で、世界的には最も森林国であります北欧、スウェーデン、フィンランド、それからソ連はじめそのような国と、マーケット的には地中海、イタリアから始まりまして北アフリカから中近東が、ヨーロッパ北欧の木材のマーケットでございます。そのなかで北欧は非常にフラット、ドイツもそうですけどそのような国の木材と、急峻な山国でありますオーストリアが、五分にマーケットで戦っているわけです。それを考えますと、急峻な山だから、山が切れないと言い訳が立たないだろうと思っております。

また、木材というのはオーストリアのなかでは基幹産業になっています。1つはやはりバイオマスでございまして、この発電はいたる所にできております。また、集中的な暖房、例えば 200 戸がその地域にあるとしますと、そこを支点としてボイラーで熱を 10 キロ圏内ぐらいまで運んで、そこでのセントラル

ヒーティングはじめ給湯に使うようなシステムができております。しかもボイラーの管理は24時間中1時間で済むような時代でございます。ですから昔は山から木を切って来て焚き、またそれを燃料として使ったわけですが、今それと同じような形を集中的な形でやっております。オーストリアの合言葉は、「オイル　イズ　エンド」。もうオイルの時代は終わったよということを言っております。

そういう面で言われましても、長野県という土地柄でいいますと、今後非常に未来に対しての新しい経済活動ができる部分がたくさん残っている。1つの幸いなことは、その可能性は他の県よりもすごくあり、豊かな県になれる要素がたくさんあるのではないかなと私は思っております。

【進行役　小林紀之　氏】

それでは引き続き、森林や木と人々とのつながりに関して多くの著書を出版されている浜田様から、我々のライフスタイルと木材利用形態の変化などの観点からお話をいただければと思います。

【話題提供者　浜田久美子　氏】

鈴木局長や櫻井さんとお話が似たようなところがあるかと思うんですけれども、私が森をテーマにした著述業になって、20年近くになるんですが、その間に明らかに一般の私たちが木に求めていくものと、それから社会全体で木を使おうとする動きが、変わってきているというのは本当に思うんです。明らかに追い風になっているというふうに思うんです。それで自分自身が木を使うということ様々やってみていくなかで、そのなかでも、やはりどうしても大きく感じている「壁」というのがございます。私も取材でヨーロッパに何度か行っているんですが、そこで痛切に思っているのが、ヨーロッパで今、櫻井さんのオーストリアのお話のなかにもありましたが、住宅と暖房との関係っていうのは、非常に密接です。日本は個室暖房というか各部屋を、この会場も今数えたら、8つのエアコンが付いていますが、各部屋で暖房する。住宅を建てる時と暖房をどうするかということは、ばらばらに考えられている。ヨーロッパの場合は確実に、今、櫻井さんが集中暖房っていうふうにおっしゃっていましたが、例えば水道や電気が各戸に配給されるように、熱が配給されている。あるいは一戸建てでも地下にボイラーがあって、その地下のボイラーの熱が各部屋を暖めている。セントラルヒーティングシステムですけれども、そのシステム

を持っているっていうことがものすごく大きなポイントになっているんだと思います。

木材の利用で一番大事だと言われているのは、カスケード利用って言われている 100 パーセントとにかく木を使い切ること。製材の柱だとか板だけではなくて、全てを使い切るっていう点で欠かせない最終消費が、燃やすという点なんですが、燃やしたものを使うというシステムを日本は持てていない。非常にインフラの整備がかかるという点で、なかなかそこに踏み切れてこなかったっていうことが、非常に大きくあるというように思っています。それをどうするかってことについて、私もここでお話させていただければと思います。

【進行役　小林紀之　氏】

それでは、これから意見交換に入りますが、本日お集まりいただいた皆さんのご意向を確認させていただくために、まず、阿部知事からいくつかの質問をしたいということでございます。

お手元に配布しました資料袋の中に、赤い紙と青い紙が入っております。知事からの質問に対する皆さんの答えを、用紙を高く上に揚げてお答えください。

【長野県知事　阿部守一】

まず、会場には林業に関係している方、仕事上係わってらっしゃる方と、一般の方といらっしゃると思うんですが、林業に関係しているという方は青で、一般の方は赤で、揚げていただけますか。

林業関係者の方が７～８割って感じですかね。まず林業関係者の方だけにお伺いしますけども、例えば、エネルギーの固定価格買い取り制度のことですとかね、あるいは今国もいろいろな支援政策をとってもらっていますけれども、森林の活用に対して、追い風が吹きつつあるんじゃないかという話をさせてもらいました。実際に森林・林業に携わってらっしゃって、そういうこと感じているか、伺います。

半々よりちょっと感じているという方が多いですかね。（林業関係者への質問：林業に対しする追い風を感じる６割、感じない４割）

そうしましたら、今度逆に、さっき少数だったですが、一般の、森林・林業関係ない方にお伺いしたいと思います。やっぱり長野県の資源として、森林資源は大事なんで、例えば先ほど鈴木局長から、まな板もプラスチックになっちゃったし、燃料も薪から石油に変わっちゃったという話がありましたけども、

自分たちの森林を守るために、なるべく木材を買おうとか使おうとかって意識している方は、青。「あんまりそんなの考えてないよな」っていう方は、赤でお願いします。

結構意識をしていただいてらっしゃいますよね。（一般県民への質問：木材製品を買うことを意識している７割、していない３割）

森林・林業の人にも、じゃあ合わせて全体でお願いしますけど、森林・林業関係者の人たちも、木材をなるべく使うようにしているって方は、青、あんまり買う時は意識してないって方は、赤でお願いします。ほとんどの方が意識されているようですね。（全体への質問：木材製品を買うことを意識している９割、していない１割）

こういうことで小林先生、会場の皆さんの思いでは、少しやっぱり追い風っていうことは、必ずしも感じていらっしゃらない方も多くいらっしゃるなということですけれども、この辺で更に対話をしていただければと思います。

【進行役　小林紀之　氏】

林業に追い風だと思う方が、林業関係者では半分以上おられるんですけども、各論になると、様々なご意見があろうかと思います。そうは言うものの、実際うちの商売は上手くいかないと思っている方もおられると思うんですけども、そのへんのことは今後またいろいろとご意見を出していただきたいと思います。

【長野県知事　阿部守一】

林業関係者であんまり追い風だと感じてないという方々の中から、ご意見少し聞かせていただきたいと思います。

【参加者】

県道とか作業道、やはり予算が足りません。オーストリアをモデルにしたらどうでしょうと櫻井先生もおっしゃいました。私はオーストリアとドイツの専門の方から講演会等で、両方の方から話を伺いました。このなかで、全く対照的な政策をとっていると思われます。

オーストリアの場合は、根こそぎ山の資源を持ってきちゃう。ドイツの場合は、ある程度の物を、枝葉を残して、それを肥料として山を頑丈にするという政策。どっちも利点がありますんで、両方折衷した方式がいいと思います。

そこでまず林道整備ですけれども、東北の震災で 80 億程度の予算が付いたと思いますが、国のお金が足りないから一旦返上しろということで、長野県もそれに応じたと思います。それが戻ってきましたでしょうか。

ドイツのような林道整備のやりかたは、例えば 50 年、100 年を見据えた道路を造る。これが主だと思います。私も林道整備工事をやった経験上、行き当たりばったりのような計画が多かったと思います。そのために災害に非常に弱い道路ができちゃって、大雨が降ると整備にかからなければ道路が使えない。あるいは山全体を考えた道路を造らなかったがために、あそこの木を出すためにこの道路を造るんじゃなくて、ドイツの方式からいえば、50 年 100 年を見据えた道路を、理想的な道路を造って、それで山の造林をどうやってやるか、長期にわたって計画をしていく。それが肝要かと思います。

【信州の木振興課長】

ご意見のとおりこれから道は、一番大事な基盤になるのかなと思います。今までは森林整備の段階で、木材を排出しない段階。これから木材を排出する時代になってくると、林道は、一番大事になろうかと存じます。壊れにくい道というようなお話ありました。県としましても、マニュアル等を作りながら、まさに壊れにくい道づくりに向けて鋭意努力してまいりたいと思います。

また、予算面につきましても、今回の補正予算、大型の補正もありますし、来年の当初予算もございますし、今度議会にかかってまいりますけども、予算面の充実についても、今前に進めているところでございます。

【長野県知事　阿部守一】

まず、「森林整備加速化・林業再生基金」は、今回国の経済対策関係で、県も 24 年度補正予算を県議会に出します。まだ 20 日からの県議会ですけれども、45 億円を積み立てようということで、今やっています。

それからおっしゃるように、林業を元気にするためにやっぱり路網の整備が一番大事だと。先ほど、場当たり的だったんじゃないかっていうお話もありましたけど、林務部と一緒に今回は、単に山の森林を育てるということに留まらないで、本気で活用できるような山づくりをしていきたいと思っていますから、そういう意味で路網の整備は、これしっかりやっていきます。

森林については、また後でお話出るかもしれませんけども、県民の皆さんから一人 500 円ずついただく森林づくり県民税を、今年度末で終わる予定だっ

たのを５年間延ばしますから、里山の整備とか水源林の確保はそっちの財源でやります。林業としてしっかり維持していくような部分は、国の補助金とかさっきの基金とかそういうものを活用しながら進めていきたいと思いますので、これまでよりは手厚い、財源配分になるということで、林務部のほうからもう一度、具体的な話をさせていただきます。

【林務部長】

今、知事のおっしゃっていただいたとおり、今回予算のほう、しっかりやっていくと。今までは、災害に強い森林をつくる、またそういうなかで林道をどうやって入れていくかって、それを考えながら、災害のないような道を開けていく、これは私どもしっかりやっていきます。

予算面も、再生基金でいえば、300 パーセントの予算をつけて道をしっかり開けていくということにしています。林業というなかでは、道の重要性ということしっかり考えていますので、道そしてまた機械化等含めましてしっかりやっていくようにしております。

【参加者】

一応林業関係の仕事なんですが、いつもお世話になっています。知事にお礼をということで、いつも林務課の方々にはものすごく骨を折ってもらっていて、この時じゃないと言えんと思ったものですから。本当に林務課の方にはお世話になっているので、ありがとうございます。知事からも各地方事務所の林務課の方に言っといてください。

それで、ちょっとお願いがあるんですが、昨年県の事業で植栽をした現場がありまして、次の年は誰が下刈りから始めるのということで進めていったところが、もう権利はない。民主党が進めた森林・林業再生プランのお陰で、集約化しないともう出ないよと。

林業なんて補助金がないとやっていけない世界なんで、「そこはもう補助金の対象にならない」、「じゃあどうするの」って言ったら、「財産区はもうお金がないからできない」と。で、県もないと。

植えたまんまの木は、また下草にやられて死んでいく、山も死んでいく。やはり、山づくりは長い時間かかるんで、今年は私が植えたから来年はまた別の人にタッチしてっていうのは止めてもらいたいと思うんですよ。はっきり言って５年くらいは下刈りするつもりで予算付けてやっていってもらいたい。搬出

にかかるコスト、すごいかかるんですよ。それで木材使わないっていうのは、高いから使わないのは当たり前で、それで今森林再生プランのお陰で皆出してるんですが、そのお陰でうちが出してる材が、去年の半額なんですよ。それで雇用の関係と結びつけると、若い人雇用してくれと言われて雇用したんですけど、出しても赤字になる。やらなきゃしょうがないんでやってるんですが、全部赤字になっちゃうし、どうしようって、大変困ってるんです。

【林務部長】

県発注の事業についてのご意見ですが、県発注の事業は、公共性があるものですから、一般競争入札等でやらせていただいていますので、年度によって違うことがあります。本当は森林整備はおっしゃったとおり、長期間にわたるものですから、県の発注の分と、長期委託契約っていう、例えば森林組合なら森林組合とですね組んでもらって長い目でやってもらうという方法と、２つあると思うんです。私ども森林税、来年からもやりますけれども、そういう中でもできるかなと思いますし、また、森林整備については長い目でやる部分ありますので、その辺は、森林組合との長期委託契約が一番だと、県発注だと、どうしても不自由な部分出てくると思いますので、その辺は現場等と話し合いながら、やればいいのかなと思っております。

【長野県知事　阿部守一】

まず、県職員を評価いただいて、大変ありがとうございます。県の職員を褒められるのが、私は一番嬉しいんです。また、林務部の職員にも伝えておきたいと思います。

コストと雇用の関係は、実は産業として進めていく上で一番重要な話だと私も思います。これは、ここだけこうすればいいっていう話では多分ないんだろうと思っているんですが、私はやっぱり森林整備には当然、税金投入していかなきゃいけないという部分があって、そこはそういう思いがあるので、県民の皆さんから、他の例えば福祉だったり医療だったりいろいろありますけれども、まずは森林の部分はこれまで５年間やってきて、まだこれからも必要性があるので、５年間なんとか県民の皆さんの負担をいただいて、里山整備等をやっていきます。ただ、県の財政も無尽蔵に財源があるわけではないので、どこでどこまでやっていくのか、例えば今回、里山整備やる時にも、以前よりは少し対象を厳格にさせてもらっています。土砂災害等の危険があるとか、里山のなか

でも優先的にやっていかなければいけない所を対象にしようと思っていますので、まず税金を入れる所と入れない所と、これ今日関係者大勢いらっしゃるので、そこはもしかしたらいろいろ議論があるかも知れません。とはいえ、なんでもありという話は、これ税金としてはまずいのかなと私は思っています。そういう意味では、必要性の高いところには集中的に財源を投入していくことになります。

それからもう１つ、これは未来永劫税金を投入しないと回らない、持続可能性がないということだと。これまた、これから人口はどんどん減っていきます、税の負担する側は減るわけですから、そうすればやっぱり、木材をなるべく利用する。木材の価格が下がることへの対応、その価格をどうやれば上げていく仕組みになるのかっていうところは、一番大事だと私は思っていまして、そういう意味では需要側・消費側の拡大をもっとしっかりしなきゃいけない。今の森林の流通のところは、ある意味で少しパイプが詰まっているのではないかと思われるところがあるので、そういうところは、税金を投入して、広げる中で全体として循環していく仕組みを作っていかないといけないと思っています。

まだ、追い風の実感がないなって思っていた方も多かったと思いますけど。そこは全然でき切れてない、昔の仕組みからあまり変わり切れていないので、そういう感覚なので、我々はしっかりパイプを広げて、しっかり循環できる仕組みに繋がるようにやっていきたい。

そこは林業として回るところ。林業として回らないけど、土砂災害等で危ない所には、税金を入れてやっていくということを、しっかり選別しながら取り組んでいきたいと思っています。

（２）意見交換後半

「多様な木材利用の創造～あたりまえに木のある暮らしをめざして～」

【進行役　小林紀之　氏】

それでは、意見交換の後半に入りたいと思います。

最初に、阿部知事から話題提供していただきますけれども、先ほど来、出ています様々な問題が、森林・林業にはございます。先ほど私がカラマツの価格下落が、他の、杉とか檜に比べて少ないということ申し上げましたけども、会場からお話ありましたように、それでも森林・林業再生プランでたくさん排出されて以降下がっているっていうようなお話もございます。その通りだと思い

ます。今後の未来志向でどう考えていくかという場合に、冒頭、阿部知事からもお話がありましたように、長野県は森林県で、しかしながら林業県ではないというお話がありました。

特に、今日お客様は民有林に関する方が多いと思うんですけども、私も県からいただいた資料を見ますと、民有林の蓄積は県下では1億1,000万立法メートルでございます。非常に大きな蓄積があります。そのうち人工林が 7,600万立法メートルの蓄積があります。これ当然今後、懸命に利用していく必要があろうかと思います。また成長量からみると、年間 190 万立法メートルもあるというふうに聞いております。しかし、生産が非常に少ない。民有林につきましても、年間 16 万立法メートルくらいしかないということでございます。そういった現実等を踏まえながら、今後のことも進めていきたいと思います。

それでは話題提供ということで、まずは阿部知事から、県における木材利用推進の取組など、日ごろから多様な木材利用の推進についてお考えのことをお聞かせ願いたいと思います。

【長野県知事　阿部守一】

木材の話は非常に多岐にわたることがあるので、何を話せばいいかなと思いますけど。最近知事会で、結構全国の知事は若くなって、大体私と同じ年代とかもうちょっと若い知事も多くなっているんで、そういう知事と話をする中で、三重の鈴木知事は、都道府県の中では一番若いんですけれども、今年は伊勢神宮の式年遷宮、20 年に1度、木材は木曽から持っていくわけですよね。そういう意味では長野県の森林であったり木材であったりっていうのは実は日本の中でも、さっき森林県だけども林業県じゃないんじゃないかっていう非常に厳しいことを申し上げましたけど、ただそれは、ここしばらくの話で、やっぱり長野県は、かつて長い間やはり、日本の中でも重要な木材の産地であったということは間違いないわけであります。

もう一回、そこを何とか復権させたいなというのが、私の思いでありまして、それには先ほど申し上げましたが、1つには今追い風になっている国の取組は、一生懸命、林業を盛り立てようということでやってもらっていますから、まずはその施策を県としては最大限有効に使っていこうということです。「森林整備加速化・林業再生基金」については、林野庁には多分いろいろご配慮いただいて、全国的に見てもかなり多くいただけている方だと思っています。そういう基金も使っていくのと同時に、先ほど申し上げました、「森林づくり県民税」

も今回延長に当たって全く同じ形ではなくて、少し内容を変えようと思っています。少し変えるのは、例えば先ほどもお話にありましたけども、ずっと税金を入れっぱなしということは、これ未来永劫、これから 100 年単位で長期税改革やるかって言ったら、多分それは現実的な話じゃないんで、少しでも稼げる仕組みを作るということで、森林資源利活用できるような仕組み作りに振り向けていくということと、今回も大勢林業・森林関係者の皆さんお越しいただいておりますけど、やっぱりすべての分野で人づくり、人材育成と、先ほどオーストリアの話ありましたけども、そういう海外と伍していくことができる人材をしっかり作っていかなきゃいけない、そういうところにも皆さんからいただいた税金を振り向けていこうということで、考えています。

私は、子供と県内のホームセンターに行ってがく然としたんですけど、木工をやろうというんで木を買いに行ったら、長野県の木材って全然置いてないんです。これはいかがなものかと思って、実はホームセンターにも直接頼んだりさせていただいて、いくつかの店舗では県産材を置いてもらえるようになりました。置いてもらえるようになったんですけど、やっぱりホームセンターの社長と話すと、流通体制がなってないというか、要するに長野県の物をいっぺん他の所へ持って行って、それが戻ってくるといいます。それは、皆さんはどちらかと言うと生産に近い方が多いと思いますけど、小売り側としては大変なコストもかかるし手間もかかる。そういうところもこれから変えていってもらいたいなと言う話もあるので、少し流通の仕組みも変えていかなきゃいけないだろうなというふうに思います。

公共建築物については、県のものについては、しっかり使う方向で考えていかなきゃいけないと思っていますが、例えば、栄村の災害復興住宅を造りましたが、あれは栄村の材を中心に、県産材を中心に造らせてもらいました。それから今回の栄村の震災の時も実は、木材の仮設住宅できないかっていう話で少し考えたんですけども、体制が整っていなかったし、また緊急に造らないといけなかったんで、間に合わなかったんですが、この度、全国木材協同組合の皆さんと協定を結んで、今後震災が起きた時の仮設住宅も、木材で、材木使った仮設住宅を造る方向で考えていきたいと思っています。

それからこれは今研究しているとこでありますが、東日本大震災で液状化が非常に問題になりました。特に千葉とか、そういうところ液状化対策に杭（くい）を地盤に打ち込んで、長野県産のカラマツを使って、液状化対策できるんじゃないかということで、今実証実験をしているところでありまして。そういうこと

をいろいろ取り組む中で、先ほど回る仕組みを作んなきゃいけないですから、回る仕組みを作るにはどこまで消費側を拡大できるかと。いっぱい生産しても、使う場所がなければ広まらないわけですから、どこまで使途を広められるか、さっきの自然エネルギーとか、液状化対策の杭だとか、あるいは仮設住宅も含めた利用とか、そういうことをできるだけ広げていこうということで、取り組んでいるところです。

今日も展示されていましたけど、薪ストーブとかペレットストーブとか、そういうところにも、これは一般の方たちのご理解を得ながら、拡大をしていかなければいけないと思っていますし、是非そういうもろもろの取組を通じてしっかり活用される森林・木材ということを目指していきたいなというふうに思います。

新しい総合５か年計画の中でも、主要施策として「森林を活かす力強い林業・木材産業づくり」ということを掲げています。掲げているだけでは何も実現していかないので、今言ったような工夫をしながら、是非ここにいらっしゃる皆さんの知恵もいただきながら、しっかりと流通が回る、消費が拡大する、そういう仕組みを作っていきたいというふうに思います。

木材、森林整備自体は引き続き、県としてもやっていきたいと、「森林（もり）の里親」ということで企業とか団体の皆さんのお金とか力をいただきながら森林整備をしていきたいと思っていますし、それから櫻井代表取締役がお越しになられていますが、信州Ｆ・ＰＯＷＥＲプロジェクト、この塩尻の地で塩尻市とも協力しながら新しい取組、これ日本の中では有数の取組になってくると思いますが、森林を木材加工施設とそれからエネルギーとして活用する施設を一体型で整備していくことによって、新しい森林・木材活用のモデルを是非この塩尻から発信していきたいと思っています。

また、合わせて全国にも、もう一回長野県を森林県・林業県だということをアピールしていきたいと思っていますので、内定したばかりですが、平成 28 年には、全国の植樹祭を長野で開催をしていきたいと思っていますので、是非これは森林・林業関係者の力強いご支援をいただく中で、そのころまでにはいろいろなプロジェクトもっと具現化すると思いますので、「長野県はすごいことをやっているな。」、「さすが長野県は林業県だな。」と思ってもらえるように、頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【進行役　小林紀之　氏】

植樹祭の件、非常に全国に注目されることだと思いますし、また、全国の中で県に林業部門を持っているのは数少ないというふうに聞いております。今後森林県が林業県になる上では、是非優秀なスタッフのおられる林務部を、ますます充実させていただきたいというふうに思います。

続きまして、森林と木につながる暮らしを実際に実践しておられる浜田様から、「県民にとって身近な木材利用」などの観点からお話いただきたいと思います。よろしくお願いします。

【話題提供者　浜田久美子　氏】

先ほどカスケード利用、100パーセント使い切るという話、最後の段階で燃やすということについて言及させていただいたんですけれども、今の知事のお話の中からでも、Ｆ・ＰＯＷＥＲの発電のことも出てきましたが、ヨーロッパでは先ほど申し上げましたように、熱で電気だけをやるということは非常に稀で、確実に熱・電気併給。比率で見れば熱効率の方が明らかに大きいという点があると思うんです。どうして電力だけにいかないのかというと、効率が悪いというのがどうしてもあると思うんです。

だから、電力を作ることが良くないと言っているわけではなくて、そこはものすごく慎重に考えた方がいいと思っているんです。先ほど、ボイラーを使っての集中暖房は難しいというお話をしましたけれども、例えば都市を整備するというようなインフラは本当に難しいと思うんです。でも、長野県のような本当に寒冷な県は、半年暖房をつかっているなかで、こういう公共施設がリニューアルされたりする時に、木質化が謳われてはいますが、そこにきちんと木質バイオマスを使っての集中暖房ということを是非取り込んでいただきたいなと思っています。熱を確実に使えるようにしていくということの上に、電力は出てくるのではないかなと思っていまして、少しステップが必要なのではないかと思っています。

もう一点、今バイオマスの先進国となっています、スウェーデンですとかオーストリア、ドイツ。ドイツはこれからという部分ありますけれども、様々ありますが、それは単純に森林がたくさんあるとか、林業が基幹産業だということだけではなくて、常にそこを動かすというのはやはり人なんです。それは木材を川上から出してきて、最終エンドのユーザーまで、使うというところの全設計をきちんと人が、担当者がやっているっていうシステムを持っていて、部分部分を寄せ集めてでき上がっているのではないという一点を、どうしても私

たち確認しておいた方が良いと思うんです。建てれば、作れば集まってくる。やればできるっていうことでは実はなくて、ものすごく綿密に積み立てて積み重ねて、システムを作っていって、彼らは今あそこまで来ているっていう点を、見過ごすのは非常に危険ではないかと思っています。釈迦に説法になるとは思うんですけども、きちんと人づくりをと知事もおっしゃっていましたけども、本気での人づくりを是非していただきたい。ちょこっと研修しましたでは絶対にできないというふうに幾つかの国々を見て来て切実に思っています。是非人材を作っていただきたいなというふうに思います。

【進行役　小林紀之　氏】

続きまして櫻井様からお願いしたいと思いますけど、櫻井様からは、木材利用についてどういうふうに活用していくか、カスケード利用等の観点からお願いしたいと思うんですけど、更には先ほど知事からもご指摘ありましたけども、ご専門の立場から、木材の流通をどういうふうに変えていけばいいのか、その辺も含めてお話願えればと思います。

【話題提供者　櫻井秀彌　氏】

先ず第１に、木材っていうのは国際マーケットの中で動いているわけでございます。そのなかで今、構造材、先ほども鈴木先生が「柱は国産だ。」って言っていましたけど、いわゆる「梁桁（はりけた）」の部分は、北欧なりアメリカから主体として輸入しております。特に北欧は船で２ヵ月かかって日本へ来ているわけでございまして、そのような形でも日本の林業は勝てない。やはり１番の重要なところは、林業の生産性をどう高めていくかということを原点に、今日たくさんの林業関係者の皆さんお出ででございますので、この点を是非ビジョンを皆さん固めていただいて、山国であるオーストリアがなぜ生産性が高いのか、その面では勉強するところも僕は多いのではないかなと思っております。

そのなかで、なぜ今回Ｆ・ＰＯＷＥＲプロジェクトを計画したかといいますと、県の林務の皆さんとお話をしている中で、「雑木がね…」というお話を聞きまして、「雑木って何を指すの。」と問いますと、広葉樹全体が雑木だというお答えでした。この話を聞いて、僕は思わず「宝の持ち腐れだね。」と考えました。世界的に見ますと、広葉樹は非常にタイトな状況にございまして、それが豊富に長野県に残っております。先ほど広葉樹の長野県の埋蔵量、森林埋蔵量って言っていましたけど、ストックには加算されておりません。私は長野県

の中の森林資源の 40 パーセントを広葉樹が占めているということを聞いております。そうしますと、莫大な量が残されております。これを利用して世界へ出ていこうと。それにはこういうような床材なりいろいろ作っているのは後進国でございまして、非常に賃金の安い所で作っております。しかしながら日本で作るには、そこと同じような形では勝てないわけです。ですからこれをオール自動化できないだろうかということで、2 年前からドイツのメーカーといろいろ交渉した結果、6 名で月産 1 万トンくらいはできるシステムを構築できました。これによって、世界的なマーケットに打って出ることが私はできるだろうと思っております。

またアカマツ、これもなかなか取り扱う所がございませんでしたので、私どもが取り扱いをさせていただいております。これから木材、私ども年間 30 万立法メートルを買おうと思っています。ですから林業として生産、設備投資、いろいろな部分で皆さんがやって、是非 30 万立法メートルを私どもに、提供をさせていただければ幸いと思っております。また多分製材に回せる材料は、40 パーセントくらいだろうと。その他は未利用材・使えない材料としてバイオマスで処理をすることによって、地主の皆さんに利益が還元できるのではないかと考えております。またこのプロジェクトのご理解を賜ればと思っております。よろしくお願いいたします。

【進行役　小林紀之　氏】

ちょっと、今のご意見に付け加えさせていただきたいと思うんですけども。広葉樹の話がありましたけれども、実は東京都の港区に、港モデルといいまして、港区に国産材を大いに使っていこうと。これ高層ビルとかマンションに使うんですけど、床に広葉樹のフローリングを使おうという時に、供給元がなかなかないんです。いろいろ調べて見ますと、実は日本で広葉樹を供給できるのは、長野県を中心としたこの辺、それともう一つは北海道旭川の周辺ぐらいしかありません。もちろん、海外から入ってくるわけですけども、海外から入ってくる場合には、現在非常に重要視しています違法伐採問題・合法性の問題、持続可能性の問題など、いろいろと問題がございます。そういったこと考えた場合、是非当県においても雑木で消費されるのではないかというような広葉樹の活用が大事だと思います。しかしながら、広葉樹を考える場合には、先ほど言いましたように持続可能な森林っていうのが基本でございますので、切ってしまいますとなかなか次の成長は難しいということがございますので、その辺

は是非、留意してやっていただきたいと思います。

それでは続きまして、多様な木材利用の推進について多くのアイデアをお持ちであります鈴木様から、住宅における木材利用の推進、桶、樽、薪などへの木材利用の回帰。また先ほどの液状化へのパイル（杭打ち）の問題などの観点からお話いただければと思います。もしできましたら、先ほど会場からもご質問ありました、森林・林業再生プランによって、たくさん材を出したら、高く売れなくなったという問題に関して意見がありましたらお願いします。

【話題提供者　鈴木信哉　氏】

さっき、「柱は国産材で」って言ってきたんですけど、柱ぐらいしかなかったという意味で、実は今、柱も 50 パーセントしか国産材がないんです。あとの 50 パーセントは、ホワイトウッドというヨーロッパから入っている集成材の柱なんです。日本人は家を建てる時に、樹種にこだわらない。

うちの奥さんもそうだったんですけど、システムキッチンだけしか関心がなくて、家の構造材には全く関心がない。だから、なかなか良い家が建たないんですけども。柱は 50 パーセントしかないんです。梁だって昔はアカマツだったのが、ほとんど国産材がない。それくらい使われてないんです。住宅の分野の中だけでみても、もう既に使える拡大する分野っていうのは、まだまだたくさんあるんです。

カラマツがなぜいいかって話をされましたけど、それは強度を測った場合に、曲げに強いっていうのがあるわけです。それだけ長野県のカラマツは非常に強いんです。そういう意味で、実力を実際の品物に生かしていくっていうことが大事だと思うんです。先ほど、いっぱい出したら売れなくなったっていうのはあるんですけども、それは、需要が供給を少し上回る形でやっていかなきゃいけないっていうことで、需要を常に捕まえておかなきゃいけない。

現在、国有林と民有林と合わせて、長野県森林組合連合会の東信木材センターに、カラマツの小径木を６ｃｍから１ｃｍ刻みで大量に供給していますが、あまり値段言うと怒られますが、スギよりははるかに高い値段で売っていると思います。ということは、30ｃｍであってもなくても、６ｃｍでも値段は同じで、細い方が高いです。こういうのをきちっと自分たちで理解するということです。なぜかと言うと、造園屋さんは、元々、竹の業界でやっているんです。全く付き合いがないんです。木材屋さんは、彼らが何が欲しくて何をやっているかって、全然需要が掴めてないんです。そういう意味では、もう一度やはり

需要の末端っていうものを、きちんと横の連絡を取ってやっていかなきゃならないですというふうに思います。

そういう意味で、先ほどもありましたけども、私は一般の住宅以外の分野にもきちっと広めていかなきゃいけないと思うのですが、皆さん誤解で、木造は高いと言っているんです。ところが木造と鉄筋コンクリート比べたら、地盤の柔らかい所は木造の方が有利ですし、高くなれば鉄筋・ＲＣは有利ですけども、５～６階建てではコストは変わりません。ところが、一番大事なのは木材はどんな寸法でもできるっていうことなんです。規格をきちんと言わないと、安く供給できないんです。なんでも出せるっていうのは良い意味でもあるけど、実は悪い意味でもあって、皆さんお分かりのように、既製品は安くて特注品は高いんですよ。オーダーメードの背広高いじゃないですか。同じように、木材は何でもできるって言わずに、この寸法だったらこのぐらいでできるというきちっと言えば、コストがきちっと抑えられて建つようになると思います。

多くの方が、木造の３階建以上が建たないと思っていますけど、今、世田谷とか銀座の２丁目にも木造の６階建てのビルが建つんです。耐火建築って言う言葉は、木造を排除する言葉でしたけども、火に強い木造っていうのはこれからどんどん出てくるんです。そういう意味で、我々ももう少し技術開発なり、ＰＲに務めなきゃいけないと思っています。

時間がなくなったんで、最後に桶樽の話だけしますけども。ヨーロッパから入って来ているワイン・ウイスキーは全てオークなんです。木の樽なんです。この間、ウイスキーの需要が拡大したんで、大手メーカーが山梨の工場の桶樽を増強したんですけど、１億円かけて木の樽を買ったんです。ところが日本の日本酒メーカーだけは全てが木じゃないんです。元々スギだったんです。今は、ＦＲＰのタンクにわざわざ木の匂いを付けるために、スギの木端を入れて匂いを付けてごまかしているんです。こういったところは我々もう一回反省しなきゃいけない。元々桶樽に使っていたのは、一番いい無節（むふし）の木なんです。長野県は大温泉地ですけど、温泉に行っても、木目を似せたプラスチックの湯桶があったりするわけですよね。こういった所をもう一度自分たちから見直さないと、おいしい物を県外に出す場合は自分たちがおいしいと思わないとお勧めできないように、やっぱりもう一度地元を見直してやってほしいし、我々も最大限の協力をしたいと思っています。

【進行役　小林紀之　氏】

本当に鈴木局長がおっしゃったとおりで、我々もっと木材使っていこうということで、私も長野の温泉大好きなんですけど、是非、長野県中の温泉に木を使うということを進めていただければと思います。

【長野県知事　阿部守一】

先ほど浜田さんからお話あった、熱利用の話は、私は全くそのとおりだと思いますし、あと、部分の組み合わせじゃなくて全体をコーディネートしなきゃいけないというお話で、人づくりは、今回の予算で、フォレストコンダクターっていう人を育成しようということで考えているんで、できれば林務部の方から少し人づくりの話を紹介してもらえればというふうに思います。

今、鈴木局長から話があった風呂桶だったり、酒樽だったりは、観光部や商工労働部と問題意識を共有して、行政の縦割りになりかねないところなんで、林務部のテリトリーだけで、薪ストーブであるとか一生懸命広げようと思っても限界があるので、ちょっと良いヒントをいただいたので、観光部サイドと商工労働部サイドにも私から話をして、私からも個別にお願いをして、少しまたそういうところに広めていきたいと思います。

【信州の木振興課長】

信州フォレストコンダクター制度について、ご説明したいと思います。コンダクターとは、指揮者という意味でございます。今までの私ども、いろいろな場面で人材育成してきたわけでございますけども、ラインの狭い世界の、狭くて深い人材育成っていうことがあったわけですけども、全体を指揮できるような人材っていうのが、これから一番大事になってくるのかなということでございます。ただ簡単に研修して、何泊か泊まって研修して育つようなものではありませんけれども、来年以降の新年度事業でございますけれども、10 名ということで、各地域各事業体から現実的な課題・問題を提示していただいて、その課題・問題を解決する人と研修方法まで提案していただいて、その中で受け身としての研修じゃなくて前向きの、主体性のある研修をやっていただくような仕組みを考えております。是非これからの 10 年 20 年、長野県林業の大きな意味で、引っ張るような人材育成を進めてまいりたいと思っております。また、細部につきましては、この後の森林税事業のご説明の中でご説明したいと思っております。

【長野県知事　阿部守一】

是非、人づくりは、浜田さんのご指摘のように、私も一番大事だと思っていまして、実は観光の側面でも「信州・観光地域づくりマネジメント塾」っていうのをやって、行政のやる研修っていうのはとにかく、ただで研修受けてもらって、何かわかんないけど一日聞いて、そのうちの 10 分の 1 ぐらい持って帰ってもらえばいいかなって研修が多いですけど、そういう人づくりのやり方やっていても多分良くならないと私は思っていますので、先ほど申し上げた、フォレストコンダクター25 年度、10 人の目標ですけども、予算の金額 430 万円ですから、単純に 10 で割れば、43 万円かけて人材育成する。普通の人づくりというか普通の行政がやってきた研修とは違うものにしていきたいと思っていますので、是非皆さんの中から、こういう人材がいるよっていう方がいれば、教えていただければというように思います。

皆さんに質問する時間あんまりないんですけども、先ほどからいろいろ利用の話について出ていましたけども、皆さん身近な所で、木材需要で工夫をしているよという方は青。あんまりしてないよっていう方は赤で、揚げていただけますか。

結構関係者が多いけれども、赤が結構多いです。せっかくの機会ですから、我々だけ一方的ではいけないので、今酒樽の話とか風呂桶のお話はありましたけど、私は木材利用について良いアイデア持っているんで、ちょっと話させてくれっていう方がいらっしゃれば、お願いします。

【参加者】

知事さんの森林県から林業県へっていうものに期待をしております。私林業者で、財産区の山の組合長をしております。そんな関係で、木の値段が少しでも上がれば、ありがたいと思っておるところなんですが。先ほど実はひとつ知事さんが液状化現象地に杭材（こうざい）をということで、信濃毎日新聞にも出たわけですが、かつて昭和 30 年代の高度成長の始まる前ですが、うちの方からは、海岸端の埋立地に、杭材としてカラマツが相当出荷されておったわけであります。その当時は海岸端の埋立てに使う物が電信柱よりもかなり高い単価で出て行ったというふうに記憶しとります。日本の林業は本当に昭和 40 年代から、私は林業でなくなったと思っとります。安い外材にどんどんどんどん駆逐されて、昔は木材業者が山を購入に来たわけですが、今そんな山を買いに来る業者は全くおりません。私も一生懸命山に木を植えた人間ですけども、親の代からそれ

から祖父の代から植えた山が、今では本当にお金にならないということです。ということで、本当に「業」ではなくなったというふうに私は思っておるわけなんですが、先ほど出てきました、林道の話やらそういったことで、また少しでも明るい面が出るように期待をしております。

もう一点、先日、櫻井社長さんの工場を視察させていただきまして、バイオマス発電の予定地ならびに予定の内容を聞かせてもらったところでありますが、こういった面でも、今までは間伐材でも切り捨てで、昔だったらお金になったっていう物が、今は全くお金に何にもならないで山で捨てられている物が、櫻井社長の所でやられますバイオマス発電で少しでもお金になるようになればって、それも期待をしておりますので、どうぞよろしくお願いします。

【話題提供者　鈴木信哉　氏】

杭(くい)の話が出たんで、大分関わっていますので話したいと思います。ご存知のようにカラマツの第１次時代は、工材用の木杭として膨大な量が出まして、長野県は土木材王国って言われるくらい出たわけです。その時代は電柱より高かったっていうのは事実でして、実際に日本の埋立地はほとんどが木杭が打込まれておりました。それが木杭ではなくなって、今では固化パイルとか別の物になったんですけども、東日本大震災で液状化っていうのが起きました。これは鋼管では止まらないです。やはり木杭の方が遥かに効果があるっていうことで、これをデータとしてとろうと。今まで海岸線へ打込んでいたのは昔からやっているのでいいんだってやっていたんですけど、やっぱり数値として科学的に実証するっていうことが必要なんですね、今の時代は。それを今長野県さんと一緒に、データをとっていまして、これの認定が下りれば、これから東京の湾岸はじめ、ほとんどが実は液状化の対象地なんです。ここになんとか杭を打ち込んでやっていきたい。これは環境パイルよりか値段は安いです。我々が思っている値段は、実は今のカラマツの値段から比べて遥かに高いですけども、他の工法より安いです。というくらい我々のカラマツでやるのは安いということなんです。そういったことで、ちゃんと技術的データを採ってやっていきたいというふうに思っとりますので、是非データがきちっと揃って、たくさん注文が信州にくるように期待をしておるところでございます。

【進行役　小林紀之　氏】

ちなみに、ちょっと追加をさせていただきますと、実は、そういうふうに支

柱に木材を使って長い間使うっていうのは、木材の中にあるＣＯ2、炭素を固定するには非常に大きな価値があります。つまり温暖化に非常に貢献するということになります。後ほど、木材の固定認証について表彰式がありますけど、当県ではこれについても認証していこうと、温暖化防止効果があるということで、固定量認証していこうということを考えていますので、よろしくお願いしたいと思います。

現在、我が国の森林・林業の基本施策で、木材の自給率を 50 パーセントにもっていこうと。つまり現在輸入しておりますが、できるだけ自給できるようにしていこうということが重要な施策になっております。これは現在の倍くらい木材を使う必要あるんですけれども、そういった面で、どのようにしていったら国産の木材を、もっと使っていけるかということで、ご意見ありましたら承りたいと思っていますが、いかがでしょうか。

【参加者】

先ほど基礎杭の関係で、鈴木局長からお話あったんですけども、ただひとつだけ、今データ収集をしているということだったんですけど、これは土を固めるためのデータ収集でありまして、昔から言われております基礎杭のためのデータ収集はしておりません。ということは、先ほど他で使われた杭の話はされていますけども、そのデータ収集は、されてない。しかし使われて来て、事実もっているんです。もっているなら使いましょうよという、ひとつの合意形成ができれば良いと思うんですが、例えば長野県で使う基礎杭については、カラマツＯＫですよというふうに、建設部、林務部、農政部等でローカル・ルールを作っていただければ良いのではないかなと、こういう提案をさせていただきたいと思います。これは佐賀県と新潟県では、事実やっておられるというふうに聞いております。こう提案させていただきます。

【長野県知事　阿部守一】

良い提案だと思ってお伺いしましたので、受け止めさせていただきます。

【参加者】

上伊那の「森だくさんの会」で、森林ボランティアをさせていただいております。私たち森林ボランティアは、毎月第２土曜日の午前中に、木の間伐をしているんですけども、その間伐した木を使って何か作れないかということで、

いろいろなアイデアを出しまして、商売にしているわけではないので難しい話はできないんですけども、東京へプランターを作って持っていくと非常に好評で、信州の木ということで売れることがあります。

もう 1 つ、自分たちができることとして、やはり多くの人たちに木材の良さというものを伝えていきたいと、そういうことを考えていますので、これからも是非県の皆さんのバックアップを下に頑張っていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

【進行役　小林紀之　氏】

様々な意見ありがとうございます。まだまだご意見はあろうかと思いますが、是非いろいろな方向で、県の方もしくは知事の方に意見が届くようにさせていただきたいと思います。また知事をはじめ、林務部の皆さんには、今日のご意見を是非受け止めて、進めていっていただきたいと思います。

３　知事終わりのあいさつ

【長野県知事　阿部守一】

皆さん方の思いも聞かせていただくなかで、進行していただきまして、ありがとうございました。また、小林先生をはじめ、私よりも森林のことに詳しい皆さんのお話聞かせていただきまして、大変ありがとうございました。

先ほど森林県ではあるけれども林業県ではないのを、是非、林業県にしていきましょうという話をさせていただきました。実は祖父が秋田で、私は小さい時は「守一がでかくなったら、山やるからな。」とか言われたんだけど、爺さんは酒飲み過ぎて山を手放しちゃって、今は何にも財産がないです。

ただ、昔、今でもそうかも知れないけど、山は財産だったんだね。残念ながら今は財産と言えるかと言うと、少しむしろ負債側になりかかってしまっているんで、これもう一回ですね林業の活性化されるってことは、山を財産にするってことですから、是非皆さんの力を借りて、この長野県の山を財産にするように取り組んでいきたいというふうに思います。

それから新たな総合５か年計画では、先ほど申し上げました産業構造を転換しようと。産業構造を転換する方針の頭に、「『貢献』と『自立』の経済構造への転換」と掲げています。自立、例えばエネルギーにしても資源にしても、やっぱり地域の自立に繋がるものにしていきたいと思っていますし、それから貢

献。私は長野県の森林は極めて、県民に対してはもちろんですけど、他の県のあるいは世界に対しての貢献度が、実は高いと思っています。ＣＯ２の吸収県であるということはもちろんそうですし、それから長野県から流れ出る川は、皆ほかの県で利用している。我々が山を森を守って、水資源をかん養しているから、下流県は水に困らずやっていけるわけです。私は自分たちだけが良ければいいという発想では、多分山は財産にならないし、稼ぎは出てこないと思うんです。世界に対してもほかの地域に対しても、貢献するんだとそういう誇りと意気をしっかり皆さんと共有した上で、この森林を守り林業を活性化していきたいというふうに思います。

今日、まだまだ話したいと思った方、大勢いらっしゃるかと思いますけども、長野県の林業活性へ向けての取組は、まだ緒に就いたばかりと思っています。これからいろいろな取組を、しっかり進めていきたいと思いますので、どうか今日お集まりの皆さんには、様々なお立場から引き続きご支援、ご指導、ご協力いただきますことを、心からお願いを申し上げまして、私の結びのあいさつといたします。今日はありがとうございました。